

仙人道場 加護坊山パークゴルフ

20世紀の変化は余りにも大き過ぎた。戦争が繰り返され、貧困に耐えながら、生きつづけた人類の歴史でもある。敗戦は日本をおおきく変え、人の心も変えた今、自然公園で親しんでいる東北の聖地、加護坊山も、戦後、ゴミの山に変わりつつあった。モトクロスでオートバイが駆け巡り、三千頭の養豚場で糞尿が臭い、隣接町村のゴミ処理場まで建設された。

自然公園として復活を願う運動は年々広がり、隣接町村の境を越えて公園を計画、滞在型の施設を選択していた。それは世代を超えて親しめ、継続できる魅力、健康が自然と作られる成果を期待していた。その時、幕別のパークゴルフに出会ったのである。自然をそのままに活用でき、ゴルフが牧夫の玉遊びから生まれたロマンに結びついた。

血液のさらさらを続ける

生きることは「書くことと、あるくこと」といわれ出した。身近な生き方に「あるく あおもの あんみん」の生活がある。

それを支える心臓は一日10万回、血液は一分間に5リットル心臓からでてゆき、かえってくる。血液をさらさらにするには、食べ物 気分 運動 環境にも左右される。足は第二の心臓と言われる足腰は脳の働きにも影響があるとも言われ出した。この足腰を一番使う運動は、ゴルフである、ゴルフもパークゴルフも、プレーの時間は、楽しく続けられ、足腰をねじる運動として共通する点が多い。

欲を言えば、生理習慣「はく 出す 捨てる」の三つが欲しい。はくは呼吸の呼であって深呼吸、出すことは、糞、尿、汗など出るように動く、捨てることは、身体のために不必要な物は全て捨てることである。血液のさらさらを続ける生理習慣、パークゴルフの生活習慣は、宇宙規模で呼びかけ、パークゴルフ人類で21世紀の平和を築く夢を共有して見たい。

<プロフィール> 大正12年宮城県田尻町生まれ。15年間の教員生活を経て、昭和35年より農業に従事。50年には田尻町長に就任し、ユニークな施策を実行。平成3年には加護坊山にパークゴルフ場をオープンする。平成7年町長を勇退後、国際田園研究所を開設した。9年I P G A 設立10周年記念式典で講演も。
